

第5部

新たな四国創造への提言（その4）

—四国に住む者の視点から—

西村澄子

- I 2つの視点
- II 仕事・社会活動
- III 暮らし
- IV 取材から見えてくるもの
- V 「四国カルテット」のステージ

I 2つの視点

1. 生活者として

私には四国について2つの視点がある。第1は生活者としての視点。私は愛媛で生まれて、高知に嫁いでいるが、夫の転勤で6年間徳島に住んだ経験がある。瀬戸大橋架橋前は広島や岡山に住んでいたの、四国は外から見たこともあるし、一般の方よりは県のボーダーラインが薄い感はある。香川県についても徳島にいた6年間で、満濃池で釣りをしたり、屋島や四国村、小豆島を何度も訪ねている。私の中では四国は一つ。子供も故郷は四国という感じで捉えているようだ。

2. 取材を通して

第2の視点は、取材を通しての視点である。マスコミの仕事をしていたので、生活者の暮らしと、もう一方ではマスコミの仕事で伝統に触れたり、特徴のある場所を訪問したりしている。また反対に問題点等を取り上げることもあるので取材を通して県の様々な特徴と向き合えたと思っている。そういった経験から、私が見たこれからの四国について話しをしたいと思っている。

II 仕事・社会活動

1. 四国を考えるきっかけ

仕事や社会活動を考えるきっかけは四国に三つの橋が架かることになった1年前にあった。“我々四国に住む者はどのように橋を迎えたらいいのか”をテーマにNHKで四国4県4局が力を合わせて番組を制作することになった。高速道路が出来始め、ハイテク企業の進出等もあり、『四国の選択』という番組をシリーズでやることになり、1984年の7月に第1回を放送している。1回目は、徳島県の池田が位置的に

四国のおへそにあたるということで、池田に100人が集まったり、2回目は四国を中継で繋いで11月に放送。3回目は翌年1月、四国4県の知事が集り、番組に寄せられた意見等を踏まえて『どうつくる明日の四国～四国4県テレビ知事会談』のタイトルで生放送した。4県の知事のテレビでの生対談だったが、視聴者も電話で参加出来る生放送はそれが初めてだった。その際、井原先生と私が質問者として各県の知事とお話しをさせていただいたが、その番組が私が四国を考えるきっかけになったと思っている。とても新鮮で充実した番組だった。

当時はまだ高速道路は0メートルで、『道が繋がっていないから』等、色々な意味で言い訳が多かったように覚えている。その後、Xハイウェイができ、15年経った今年、井原先生が『四国自立宣言』という本を出された。橋が架かり、高速が出来たが振り返ると感慨深いものがある。

2. 徳島で

高知では様々な番組を担当したが、取材でお会いする方はみなさん地に足がついた地道な活動をされている方ばかりで、私自身、何かやりたいという思いが強くあった。そこで徳島では朗読奉仕や人形劇団等に取り組むようになった。大鳴門橋が開通して1年足らずの頃で、徳島はまだその興奮に沸いていた。

ボランティアの人形劇団に入っていたが、徳島は人形浄瑠璃が盛んな土地なので、リーダー的な女性の発案で長野県飯田市の国際人形劇に関連して「国際人形劇フェスティバル」を開催した。世界各地の人形劇が来ると同時に、一方で人形浄瑠璃を上演。県内のアマチュアの人形劇団も一つのステージに集まる「国際人形劇フェスティバル」が始まった。フェスティバルはその後、10数回続いたが、今は休止している。リーダーの女性が神戸に帰ってしまい、中心の柱を失ったこともあり、残念ながら活動は止まっている。その後、彼女に再会した際、神戸でも同様の活動を2年程したものの、やはり現在は休止状態だとのこと。社会活動を続けるには様々な要素が絡み合っていることをそのとき理解した。

一方で、視聴グループ活動をしていた。その活動の一つとして「徳島テレビ祭」を開催してきた。徳島青年会議所と視聴グループが一緒になって始めたが、その頃湯布院の「映画祭」というのがあったが、「徳島テレビ祭」は、たまたま青年会議所の熱意で誕生している。あの頃はテレビの問題点が話題になったり、ドラマ等もあり、色々な方をお呼びした。お金が無くて、脚本家や俳優等、ギャラ無しで出演してくれた。私が関わったのは第3回目からだったが、その後、視聴グループの代表をさせていただいた。1990年の第5回はニュースキャスターが初めて登場した頃で、ニュースとドキュメンタリー、ドラマの形だったが、築紫哲也さん、松平定知さん、平野次郎さん、国谷裕子さん、森田美由紀さん、内田忠男さん等、非常に充実したメンバーで「キャスターって何だろう」というテーマで討論をした。

衛星放送がはじまっていたので、「徳島テレビ祭」は衛星放送で流れた。みんな燃えて頑張った。参加者のみなさんはギャラの代わりに“海岸線を走るだけでいい”と仰っていたが、四国の良さはやはり自然だということを再認識させられた出来事である。

ここでもまた、リーダーや社会活動を続けてゆくために、青年会議所や視聴グループ等、核になるところがあったから出来たという思いがある。また橋が架かったタイミング等、歴史や風土に熱意が加わり、色々な意味で勉強になった徳島の生活だった。

高知県の安芸市は「浜千鳥」を作曲した弘田龍太郎の生誕地だが、ここでは毎年「童謡フェスティバル」が開催されている。ところが13年ほど続いたこのフェスティバルが休止されることになった。なぜなのかと思ったが、理由は地元の人たちがあまり熱心ではなくなったことと、観客が少ないこと。そのため市の予算を使って行うにはもう限界であるとの理由である。その少し前に徳島の「童謡を歌う会」は13

年も活動を続けているという話を聞いていたので、その違いが何処にあるのかを考えた。徳島ではリーダー的な人が童謡をふる里として捉え、童謡を心のふる里に繋いで続けているようである。色々な意味で必ずしも歴史的な要素だけではなく、何でもやっていけるということを感じた。

3. 伝えるということ

“伝えるということ”は、みなさんを繋げることができる。伝えることは四国が一つになる上での大事な要素ではないかと徳島で思うようになった。それは藍染めの古庄理一郎さん、先年亡くなられたが、取材に伺った折、アク抜きの良い灰が今は無いという話をラジオでしたところ、静岡県沼津のボランティアの人たちが、沼津には鯉節を作るときに灰がたくさん出るとかで、灰が沼津から届いた。その灰で藍染めが続けられた。あれから10年以上が経つが、今年、高知で染屋の古庄さんにお会いする機会があった。沼津の灰はずっと送られているし、藍染めの交流も始まり、輪はとても広がっているとのこと。私は現在もNHKのラジオ番組で、地域づくりに関して電話のリポーターをしているが、日本で一番、四国で一番ということではなく、こんなことがあるので参考にしてくださいという意味で今は伝えることが出来るようになった気がする。

4. 高知で

高知に帰ってからはフルタイムの仕事について。コンサートホールの企画と運営だったが、1年目は大赤字で、2年目に入ってからでは駄目だということで、東京のホールを参考にして、企業の文化支援グループ、「オピニオンズ高知」を作った。企業のメセナ時代が終わり、徐々に不況に入り始めた頃だったが、協力的だった。コンサート等が開催できるようになった。以来、ネットワークの大切さを実感している。

現在は「高知エコデザイン協議会」という、産・官・学・民で構成され、循環型社会構築に向けて環境ビジネスを目指そうということで出来た会に参加している。これは経済産業省の助成金を得て、環境メッセを来年行う。これからはネットワークと環境というキーワードや、その時代に合わせたタイミング等、色々な要素で活動が行われてゆくのではないかと。

環境問題に興味を持ったのは、それぞれが意識を持つことは大事だが個人には限りがある。また企業のボランティアやメセナにも限りがある。経済社会の中に環境を取り込まなければこれ以上の進展はないという考えがあるので、「高知エコデザイン協議会」には今後も注目していきたいと思っている。

以上のようにネットワーク・キーワード・タイミングが大事なことを『四国自立宣言』の36ページに井原先生が書かれている。色々組み合わせさせて関わってくるが、ネットワークがいかに大切かが分かる。例えば、ハード面も、今、道路公団の民営化に向けて、4県の知事が踏ん張っているが、各県均等の配分であればそれぞれに大したことが出来ないのではないかと。どこが大切かを四国の中で考えて造ってもらわなければ四国全体にとって良くないのではないかとという記事が高知新聞に出ていた。こういったハード面のネットワーク等は非常に大切である。ソフト面も、香川にはインテリジェントパークがあるが、高知にも高知工科大学の産・学の連携で会社が出来る等、様々な研究が進んでいる。四国4県の新聞社が「四国平成義塾」等を考えている。組織、環境等を色々な形で組み合わせた取り組みが大切ではないかと思う。

Ⅲ くらし

1. 本四三橋時代

三つの橋が架かったことは四国にとってどうなのか。架かる前には様々な意見があったが、実際に架かると選択肢が多くなり、豊かになった。橋が架かったことで高知から日本海まで日帰りで行き来できるようになり、色々な面で豊かになった。『四国自立宣言』の114ページでJRの梅原さんが経済の流出や活力の低下現象が起きていると書かれているが、たしかに今はそうかもしれないが、現実を認めて前向きに考えると、私たちひとりひとりが、豊かになっていると思われる。「21世紀を奏でる四国」、私のイメージの四国は四国4県がカルテットとして奏でたらどうだろうかというものである。そういう意味からするとひとりひとりが豊かになって演奏者としての力を付けてきたと考えられないだろうか。

45ページに井原先生が“四国の自立は流動性のある自立でなければならない”と書かれているが、代謝エネルギーの活発なモビリティ（流動性）のある自立でなければならないことを考えると、ホールとしての条件整備が出来たのできたのではないかと考えられる。橋が架かったことでみなさんが来てくれるための条件整備が整ったと捉えられないかと考えた。

もう一方で、Xハイウェイの開通で本当に四国が一つになったような感じがする。色々な意味で問題はあるかもしれないが、動きやすくなったことは確かである。四国は一つということで、四国の企業が様々なことに取り組んでいるのが分かる。例えば、四国ガス発行の雑誌にも直島等、四国4県の訪問どころを紹介している。松山は子規記念館、高知は文学館、香川は直島文化村、徳島は大塚国際美術館等が紹介されている。四国電力やJR四国等、四国を一つとした企業が活動することで私たちの意識も一つになっていくのではないかと考えている。4県の新聞社は「四国平成義塾」を実施しているし、放送局も民放ともども、色々なことを行っているのだから、徐々に四国カルテットが形成され、ハーモニーを奏でて仲良くやっていく条件整備が色々な意味で出来ているのではないかと気がする。

何を演奏するか。何のために演奏するか。これは『四国自立宣言』のプロローグで四国地方整備局の局長が“何を演奏するかより、何のために演奏するかだ”と書いているが、これはこれからの四国を考えていくために大切なことだと思われる。

2. IT時代

15年前はファクスもまだ一般家庭には浸透していなかった。今、四国はどうなるかを考えると、情報発信が容易になっているので、その点でも生かせる時代だと思う。高知県の馬路村でもインターネットの産直で非常に発展している。香川県の会社も年商20万円の産直だったものがインターネットの産直で2,000万円になったとニュースで流れていたが、情報発信が個人でも出来る時代になり、距離と時代が越えられるようになった。

「四国平成義塾」でも新しいコミュニティを求めてということで、「IT時代でどうなるか」をやっていた。今は電子マネー等を耳にするが、インターネット博覧会が12月から行われているし、見本市もインターネット上で行われている。高知の高校で、全国の6カ所の商業高校が「高校ネットムーブ2001」として、特設デパートで産直をしたりしている。高校生でも商業体験が出来る、実際に商業が出来る時代になっている。また、「産業フェア」が来年の1月から2カ月間行われる予定になっているが、ホームページ上で全国から評価を求め、商談の場にまで持ってゆくことをするとかで、高知の産業振興センターが出展企業を募っている。バーチャルの色々なところが出てくるので、四国の地域や距離、時間を超えてやれ

る可能性が出てきていると思う。

3. コミュニケーション不足

しかし、このような便利さの一方で本当の人間の生の触れ合いが少なくなっていると言われている。色々な年代のコミュニケーションの不足から、起きているのではないかと思う。子育てから離れて久しいが、教育問題のシンポジウム等でコーディネーターをさせていただいたとき、こんなところまできているのかと驚くほどに、家庭と地域と学校が厳しい状況にある。

ではなぜここまで来たのかを連想ゲーム的に考えると、昔は触れ合いが町内にはあった。内でもない外でもない縁側というものがあった。現在は大抵の住宅は門扉があり囲まれている。縁側が無くなったのも一つの原因かと思ったりしている。スペインのパティオのような中庭も交わりにはとても役だっているように見受けられる。最近はガーデニングブームなので、これからは楽しい交わりが持てるかもしれないが、それにしても前もって約束が必要な気もする。先年訪問したヨーロッパを見ると、ヨーロッパの町には広場があり、そこは散歩や散策等、人々が触れ合うようなところになっている。そこには教会があり、懺悔室がある。人間社会に必要なコミュニケーションや癒しがうまくできていると思ったことがある。同じようなものが日本にもあるのではないか。寺の境内等、子供の頃を思い出してみた。私が育った町は愛媛県の久万町で、44番霊場の大宝寺があり、門前町で栄えたところで、近くの寺でよく遊んだ。四国には88か所がある。これは大変な財産。私も2度巡っているが、印象は、歴史的なものや荘厳な感じ等、宗教とは離れたところで受けるものも大きい。88か所と言ってしまうと巡らなければならないような感じになるが、門前町と捉えるとどうだろうか考えた。88か所を巡ってみると、地域の中で土地の方と会う機会が少ない気がした。地元の人たちの会話や産直の物が買えたりできたら、もう少しゆったりと巡れるのにも思った。門前町の感覚でもっと町で生かし、コミュニケーションの場として使ったらどうだろうか。そこでは、色々な触れ合いや出会いが生まれるかもしれない。お接待どころという昔ながらのものを生かして、なかには近くにお茶を飲む場所を備えたところもあったが、そういう風にしたらどうかと思う。それから、観光ボランティア。京都に行くと、観光ボランティアの方の説明を聞くと本当によく分かる。こういう触れ合いもあったらいい。

高知にもデマンドバスが走っているが、これはどこでも止まってくれるバスなので、こんなバスも走らせて地域の中で生かしたらどうかと思う。

空海で発信したらどうか。28ページに「癒しの文化」として書かれている。また59ページには井原先生が「綜芸種智院」について書かれている。また歴史については、88か所を巡ってみて、「歴史の上に立っている」とよく言われるが、まさにそんな感じがした。歴史のようなものを合わせて生かしていく必要があるように思う。

4. デンマーク

4年前に文部省の教育視察でデンマークに行ったことがあるが、デンマークは1814年に世界で最初に義務教育を制度化した国で、教育には大変先見的な国である。学力よりも人間教育をとという歴史的な流れがある。デンマークの国民高等学校を視察したが、中学卒業までは試験はなく、人間形成に重点を置いている。そうすれば子供は必ず伸びるということのようだ。高校入学直後の試験の成績はEU諸国の中では最も低くても、その後の伸びはめざましくて、トップクラスになるそうだ。高校での勉強は非常に厳しく、そのために落ちこぼれた学生を受け入れるために国民高等学校を設けている。この学校では主に歴史教育

や芸術に力を入れているが、資格等を取るためのところではなく、心を休める場所として18歳以上なら誰でも入れることになっている。ただ、日本のカルチャーセンターと大きく違うのは費用の8割が国の負担という点である。そういうところで人間的なもの、日本に足りないと思えるようなものを感じた。

デンマークは九州ぐらいの大きさだが、国の隅々にまで教育等の制度が充実しており、自転車のための道路も整備。経済は資本主義でも制度は社会主義のような気がした。国が小さいから色々なことが出来るのではないかという話しもあったが、それを四国に当てはめて考えると、四国だったらもっと出来るのではないかという思いもした。

デンマークにはヒュッケというものがあり、視察者に対してどこの学校でも朝は焼き立てのパンと飲み物が用意されていた。まずそこで朝食を食べてから何かが始まるといった感じで、お茶を飲んで語らい、それから問題をという考え方が私にはとても参考になった。このような点もコミュニケーションを取るための参考になりそうだ。

コミュニケーションと言えば、高知の西土佐村に大きな自然災害が発生したが、高齢者が大半の村にも拘わらずコミュニケーションの良さから死者が出なかった。これからはコミュニケーションをますます大切にしなければと感じた。

IV 取材から見えてくるもの

●土佐東方見聞録

現在、NHKのラジオで地域づくりの Reporter をしているが、室戸の海洋深層水や北川村のモネの庭、馬路村等を取り上げた。このような地域はいずれも高知県の東部に位置している。この地域がとても元気で、今回、後免町から室戸に抜ける奈半利町まで、第三セクターの後免～奈半利線が開通する。それぞれの地域が活性化しているが、その要素は各々異なっている。

1. 室戸市の室戸海洋深層水

海洋深層水は水深200メートルよりも深く、太陽の光が届かないところの海水で、無菌状態であり、地球規模で回り続けている海水である。この海水にはミネラルが多く含まれている等が解明されつつあるが、室戸に世界で初めての深層水の研究所が創設されている。最初の頃は主に無菌の深層水を魚の養殖に使えないかという目的で研究が進められていたが、人間の身体にもいいのではないかということで、1989年に研究所がオープンしている。昨年、アクアファームという商業用の取水施設が日本で初めて完成し、日本の深層水業界をリードしていると言われている。北海道でも行われてはいるが、やはり高知の注目度は高く、深層水産業の売上高は昨年が105億5,000万円。約半分の売上げがミネラルウォーターである。室戸の人は海の恵みと言っている。深層水はどこでも取れそうだが、取水となると200メートルの水深が海岸から5キロメートルのところであれば施設建設が難しく、日本でも取水が可能な地域は少ないようだ。何よりも注目すべきは室戸の深層水は県主導でブランドマークをつけている点である。県が審査を行い、それを通った所にだけブランドマークを与えて許可している。深層水で室戸市は発展しており、大手化粧品会社も深層水化粧水を製造している。また、地元の女性たちの就職先が出来たことも話題になっている。天の恵みを行政と民間が様々なルールを守っていることが現在の発展に繋がっていると感じている。

2. 北川村

ここは中岡慎太郎の出身地であるが、今はモネの庭が有名である。なぜモネの庭が北川村にあるのかと思うのだが、この村は柚子の産地で、柚子のワインを醸造しようと考えたが、ワインと言えばフランスであり、フランスは芸術の国であり、北川村の自然の光でフランスの芸術を考えると印象派にたとえられる。そしたらモネではないかということである。そこでモネが晩年を過ごした庭がフランスのジベルニー（Giverny）にあり、直接交渉して許可をもらった。そこで世界で初めてマルモッタ（Mamottan）という名称も含めて、モネの庭のコピーを許可された。凄いと思われるのは、モネの庭そのままを再現しているのでモネの絵のアンクルと同じであること。まるでモネの絵を見ているような印象がある。

ところで、自然豊かな村になぜ人工の庭をとの批判もあったが、自然の楽しみ方を逆に学んでいる感がある。日本人の場合、ややもすると施設やイベント等を期待しがちだが、フランスの人たちは自然の中でゆったりと過ごす楽しみ方を知っているようだ。はからずもモネの庭で自然の楽しみ方を学んでいるような気がする。北川村の人口は1,600人。その村に、開園して1年半の2001年10月現在で35万人もの入園者があった。中高年の女性がフラワーッキングズとして働いており、花の苗を世話したり、北川村産の食材を使った料理等を作る等、村を上げての取り組みになっている。村には行政と民間の境界がないように見受けられる。

モネの庭とは別に中岡慎太郎の生家や施設があるが、そちらも併せて回る観光ルートが自然に生まれている。中岡慎太郎は庄屋の息子で、脱藩前までは随分と村のために働いたようである。中でも目を見張る功績は村に柚子を植えたことである。モネの庭も慎太郎の恵みだと受け止めており、村の人たちが一丸となって頑張っている。

また村にはミニ高炉建設が予定されている。高炉はコークスを燃料に、廃棄物を高温で溶かし、再資源可能なガス等に分解するものである。焼却灰が飛ばないという利点のある高炉の会社は宮城、群馬、大阪府にあるが、本社が北川村に移転されることになった。経営者は北川村が21世紀の新しいエネルギー改革を行うのにふさわしい土地であるとの話しである。

このように何らかの形で活性化が進むと、様々なものを呼び込むようになるのではないかと思う。

3. 馬路村

馬路村は高知市から2時間はかかる山奥の村であるが、自然に恵まれており、日本3大美林と言われている魚梁瀬美林のある杉の産地であり、柚子の生産地である。

この村は北川村よりも人口が少なく、1,200人である。ここでは村の面積の96パーセントが森林であるにも関わらず、人々が生き生きしている。柚子の製品化をめざして農協がポン酢醤油やごっくん馬路村という飲料水を開発した。これらを「おらが村方式」で売り出した。ここには田舎の引け目は全くなく、現在では25億円産業に成長しているそうだ。

またインターネットの通信販売の顧客も32万人を超えている。全国通販ネットワーク設立準備委員会が2002年1月発足の予定であるが、これは馬路村がお手本になっている。10月26日、馬路村でシンポジウムを開催した。山の中の非常に交通の不便なところにも関わらず、全国各地からの視察団が300団を超えたそうだ。

山村留学生制度も実施している。高知県は人口が自然減の県であるが、馬路村は人口減少を食い止めている地域である。山村留学生制度で平成9年から現在までに17家族66人が転入している。平成11年には3億円で校舎を新築し、子供たちの意見を採用して建物は2階から滑り台で降りることが出来るユニークな

木造校舎である。馬路村の営林署がなくなるということで危機感はあるが、魅力的な製品開発と豊かな自然で何とか人々に訪れてもらおうと頑張っている。

また第3子の奨励ということで、国の施策とは別に、初めての子供には10万円、第2子以降は5万円ずつ加算して支給する制度を設け、出産を奨励している。実際に高校生になると出費は嵩むそうだが、子供はやはり多い方がいいということで、現在、保育所では32保護者世帯のうち、12世帯に第3子がいるようである。

また木の産業化を目指して、第3セクター、エコアス馬路村を設立。間伐材の製品化を1年間を費やして研究。食品を入れる器を商品化した。古くなったものはゴミに捨てると燃えるということで、使用を促進している。間伐材の利用が盛んになれば山が元気になると訴えている。売上げの1パーセントは「千年の森基金」にして、森に還すようにしている。現在の環境をうまく生かしたシステムである。馬路村の農協の開発者の方はいつも“商売に力を入れたわけではない。馬路村が好きで、住み続けたいからがんばりゆうだけです”と言っているが、本当に凄い話しである。ここに住みたいから、子供たちが帰って来たときのためにという気持ちが、村を今のように発展させたのではないかと思っている。

V 「四国カルテット」のステージ

1. 何のために演奏するか

カルテット等の室内楽は個々の人間の技量が高くなければ素敵な音楽は誕生しない。またソロとは異なるハーモニーの魅力がある。四国は4県であり、それぞれに特徴と力のある県が揃っている。その4県が一緒になればどんなに素晴らしいことかと思う。そしてハーモニーが色々なところで生かせたらと考える。そういう意味で「四国カルテット」を提唱した。

冒頭で述べたとおり、“何を演奏するか”ではなく“何のために演奏するか”である。これが馬路村に繋がると思われる。コミュニティーの認識をどこに置くかが大事である。例えば、高校野球では県も応援するが、最終的には四国のどこかの高校が残ると、そこを応援する。私たちが認識を四国に移したらどうだろうか。今はテレビの天気予報も4県を一緒に伝えている。本当に四国は一つの感がある。認識を四国に置き、四国に住みたいから四国が好きだからの夢が叶えば、四国はもっと素晴らしいものになるはずである。柚子と木材しかない馬路村が素晴らしい発展を見せた。四国はどの県を見ても魅力にあふれている。四国4県がそれぞれの素材を取り出し、それを生かしていけばいいのではないか。そこで何のために演奏するかが分かれば、何を演奏するかがおのずと見えてくる。そのためにはコーディネーターが必要である。四国全体を見渡して、色々なところの熟している点を、コーディネーターの力を借りて線にし面にしていくことが必要不可欠である。

2. ステージの成功に向けて

例えば北海道の産物がパックで届けられる「ハーモニーパック」。産地から季節の食物を次々に送るわけである。四国でも四国4県が一つになって産物を届けるハーモニープランはどうだろうか。四国フルーツ紀行やめん紀行等も楽しい。考えると色々なものが可能である。

様々なイベントも四国を単位で考えると可能性は大いに広がりそうだ。私自身、カルテットにこだわって取って言うと、ステージづくりも含めて、私どもがどんな参加が出来るかを考えると、まず企画がある。

これは会場や聴衆に合わせたものである。まず企画をする。そして演奏者がいる。演奏者も四国4県のどこがコンサートマスターになってもいいわけである。それを知らせる広報が必要である。口コミもある。チケット販売。裏方も必要である。ステージを作るためには照明担当等の裏方は欠かせない。そして聴衆も。地産地消が言われているが、私自身が消費者になることもある。それが聴衆である。そして放送で送る。知らせる。四国出身者が広報マンになり、色々な意味で宣伝をする。CD制作等、企画とはまた異なる形で知らせることが出来る。ステージの衛星生中継はインターネットのバーチャルの産業フェア等に当たるのではないかと思われる。誰でもどこでも参加出来る。四国というホールのステージの成功に向けてどんな役目でもあるような気がする。

様々な可能性に向けての条件整備が20世紀で出来たような気がする。21世紀は私たちひとりひとりが地元根付いて、“ここが好き”という感じで四国を盛りたてることを考えると未来は明るいのではないかと思っている。

感想と質問

司会 西村先生が仕事で触れられた部分と、多面的に地域で活動をされた経験から得た考えを合わせて出していた。とくに高知県の室戸や北川村、馬路村等、地域から様々な発信を行い、新たな村づくりに取り組んでいる具体例を出していただき、非常に考えさせられるものがあった。地域の持てる力を出せば展望が開けるのではないかという方向が出てきたような気がする。四国には全国に発信する四国霊場八十八か所のお遍路の旅がある。全国からお遍路に来ている人は結構多い。東京からも大勢の人が八十八か所巡りで四国を訪れている。そういう点で、お遍路文化は21世紀を迎えても息づいている。また香川には讃岐うどんがある。県を越えて讃岐うどんは食べられている。色々な意味で先ほどの室戸や北川村、馬路村の取り組みには展望があるような気がする。

西村 香川のうどんの人気は本当に凄い。

参加者 音楽に詳しくないが、カルテットは男女ふたりずつのメンバー構成のことなのか。

西村 4人で演奏する形式を言う。クラシックの場合は第1バイオリン、第2バイオリン、ピオラ、チェロの弦楽四重奏であり、ジャズにもカルテットがある。パートが四つに分かれて、4人の奏者が一つの音楽を演奏する。

参加者 四国はもともとバラバラであるが、神話の世界、古事記では香川県と高知県は男性の神様で、徳島県と愛媛県は女性の神様。四国を分けると香川・徳島、香川・愛媛、高知・徳島、高知・愛媛の関係は、地図を見ると分かるが、香川と高知の間には徳島県と愛媛県がある。神話の世界では四国は男性ふたり、女性ふたりのペアである。カルテットということから、神話をご存知かと思った。

西村 『四国自立宣言』の本のさし絵のカルテットは国土交通省の方の表現。神話をご存知だったのどうかは定かではないが面白いと思う。

参加者 結び付きはあったようだ。

西村 古事記に“身は一つで面は四つ”とあるが、阿修羅像を思い浮かべた。手も8本あるはずなので、みんなで力を合わせたらと考えたりした。歴史は面白い。歴史は納得させてくれるものがある。

参加者 四国に住んでいる人間にとっては住みやすさが一番大事。基本的な衣・食・住の中でもとくに食はバラエティに富んでいる。味噌汁のだしはイリコで、味噌は愛媛の麦味噌、四国4県で麦味噌を使う

のは愛媛県だけ。ワカメは徳島。土佐のウルメ鰯等、四国はとてもいいところである。たしかに食べ物
が美味しい。香川県にはうどんがあり、小豆島のそうめん、徳島は祖谷そば、高知はラーメン、愛媛は
五色そうめんがある。八十八か所にはお接待の話しがあるが、餅の美味しいところがある。

西村 人が動くのはエネルギー。餅紀行もできそうである。組み合わせも面白いものが出来るような気が
する。

参加者 香川の醤油も美味しい。

西村 今は素材に対してこだわりとか、本物志向がある。食材も本物だと地元の人はもちろん、都会の人
にも喜んでもらえる。知識を提供してくれる人たちや情報機関があればいい。四国を考える会に参加し
ていると組み合わせの必要性は話しに出るが、機関のようなものを設けるといいような気がする。今は
制約のない時代なので、何かをきっかけに地元と一緒に何かが出来るといような色々な形での取り組みが欲
しい。

司会 馬路村の取り組みにはコーディネーターがいたのですか。

西村 地元の農協の方がアイデアを出されたと聞いている。それぞれが個性を持って一緒にやることが大
事だとその方は話している。北川村のモネの庭も村の方たちが考えて取り組んだようだ。

司会 司馬遼太郎が四国について書いているのでそれを活用したらどうかという話しが前回出ている。

西村 松山にも夏目漱石が少しの間滞在しただけで、「ぼっちゃん」の小説を生かしたぼっちゃん列車の
復活等、色々なことをしている。高知にはジョン・万次郎がいるが、置かれた状況で何が出来ることがと
ても大事ではないか。

参加者 西村先生はマスコミの仕事の中でご自身が感じたことは強烈に自分のものとして残され、その集
積が新しい行政や地域の活性化を観察したときに感じるとい発表のように思える。凄い見方をされ
ている。現在の現象や実態、一つの展開を見る中で、例えば情報センターを持っていき、そこに役割を
果たす人を設置するのにどんな人材がいいのかを考えたとき、先生を置いてはいないのではないか。四
国では数少ないと思う。昨日や今日の取材ではなく、長い間、繰り返してときにはプロデュースをした
り、企画から実行までを繰り返してやっておられるような気がする。かつて大分の平松知事が一村一品運
動を地域の活性化の形で提唱したが、高知県はここ2~3年前から行政が高知西部の四万十や西土佐村
等で第3セクターを作って村おこしをしているように聞いている。高知のそういうところが香川県とは
随分と異なる。行政がテレビで高知の色々なことを紹介している。全国と交流もしている。自らが動い
て自らが村おこしをする。これは村が好きだからだと思う。3人いればひとりには故郷に帰って来るとい
う考えで、村おこしをしている姿を見ると、エネルギーとして燃え上がっているような気がする。昨年
の連休、新寒風山トンネルが愛媛から本川村の方に開通したが、谷川沿いに地元の木材を使ったセン
ター等が出来ている。高知は随分と熱心で、他県とは違うものがある。前知事は高知を国民休暇村と捉
えていた。橋が架かるようになってから、椎茸を題材に論じたことを覚えている。橋の効果が一番遅れ
ていると言われていた高知が危機感を感じていたこともある。

参加者 なぜどの地域もが燃えたのか。

西村 高知県全体の劣等感が何かを機会に危機感を持ち、燃えたのではないかとと思われる。

参加者 開発型産業の誘致や立地は全く考えていなかったようだ。外国の貨物船の寄航を目的に高知新港
が新設されてはいるが。

西村 色々な意味で大きな力は、橋本知事がご自身を広告塔と心得て、批判を甘んじて受けながら新しい
ことをする。これは橋本知事の姿勢。

参加者 おそらくみんなが燃えなければならないはずだ。知事を始め、みんなの努力が必要で、一つずつ提案している。

西村 時代もあるようだ。高知は本音の県。とても繋がりが深い。時代がそういった本音の部分が出しやすくなっている。人間がどうあるべきかをもう一度考えなければならない時代に巧く合っているのではないだろうか。

参加者 我々の生き方や物の考え方、展開、組み立てや方法にも示唆を与えていただける。本音が一番理想の姿。詭弁を使うよりは本音の方がよく分かる。親子の関係でも、本音で話すのが一番。商品も良ければ認めてもらえる。率直が理想の姿。

西村 香川県は昔から四国の中心で、高知とは異なるものがある。そういう意味でそれぞれの特徴を生かせばと考えている。

司会 四国の中でも色々な工夫をしたり努力をしている地域があるということが分かった。今後の参考にさせていただければと思う。

